



上田市立博物館 収蔵品(真田父子犬伏密談図)

太郎山山頂における真田物講談

日時: 2018年5月3日(木) 12:30頃開演

場所: 太郎山山頂付近(太郎山神社社務所)

真田物の創作講談の第2弾(第1次上田合戦後～犬伏の別れ)を若林鶴雲師匠により、太郎山の山頂付近(神社社務所)で披露します。太郎山登山競走(<https://www.uedavertical.com/>)の観戦後、ご高覧ください。



※講談師 若林鶴雲 プロフィール

昭和 24 年(1949 年)東京都台東区生まれ。サラリーマン生活の傍ら、平成 5 年から始まった故・田辺一鶴主宰の講談大学(講談教室)に通い講談を学ぶ。平成 7 年に講談親睦会(こうだんむつみかい)という講談の勉強会兼親睦団体を設立、代表幹事として現在まで様々な発表会をプロデュースしている。特に忠臣蔵ものを最も得意としており、忠臣蔵の本場赤穂市で開催されている「忠臣蔵ウィーク」では、平成 24 年 12 月から毎年 12 月に忠臣蔵講談を披露するのが恒例となっている。

■主催: 太郎山賜生会

■協力: 太郎山保存会、太郎山登山競走実行委員会、(社)日本スカイランニング協会、ずくだせ農場

■お問合せ先: 太郎山賜生会(しせいかい) 事務局 TEL: 090-5810-5211

<https://akodaira1028.wixsite.com/taroyama>

※お申込みは必要ありません。自由にご観覧ください。

※登山競走の道中にはコース整理担当がありますが、選手、他の観客にご配慮のうえ安全にご留意ください。

※ゴミは各自でお持ち帰りください。

<前回までのストーリー；「上田市誌」引用>第一次上田合戦を中心に

天正10年(1582年)3月、武田氏が滅亡。信濃国を含む旧武田領の分割配分に圧倒的な動きを見せた織田信長に対し、真田昌幸はすかさず臣属の意を表した。しかし、同年6月「本能寺の変」で信長が明智光秀の急襲により討ち死。信濃・上野(こうづけ)・甲斐国は、徳川・北条・上杉の争奪戦の場と化した。いったんは北条氏直に臣属した昌幸だったが、弟の加津野信昌らに誘われ徳川家康に臣属。天正11年3月頃より、上杉に対峙する徳川勢力最前線として、海士ヶ淵城(尼ヶ淵城・伊勢崎城=上田城)築城が開始された。ところが、天正12年(1584年)中央覇権争いにより羽柴秀吉(後の豊臣)と徳川家康の対立が深まり、「小牧・長久手の戦い」へと発展。これを機に真田昌幸は徳川家康と断絶し、秀吉と和睦していた上杉景勝に属することとなった。

上杉に臣従した昌幸の動きにおさまらぬ家康は、天正13年(1585年)8月、烏居彦右衛門尉元忠、平岩主計新吉、大久保七郎右衛門尉忠世、大久保平助忠教らに、諏訪頼忠、保科正直、知久頼氏、松平(依田)康国、屋代秀正、小笠原信嶺など信州先方衆を付け、都合7千余人で上田城を攻めさせた。これを迎え撃つ真田方は、騎馬2百余騎、雑兵1500余人、都合2千余騎に過ぎない。そこで昌幸は二男信繁(幸村、当時17歳)を上杉景勝に対し人質として差し出すことで、北信の須田満親、清野左衛門左、西条治部少輔、市川信房などの援軍を得ることとなった。

戦いは神川を中心とした上田平全域に展開され「神川合戦」とも呼ばれる。真田方は、民衆3千余りに紙旗を持たせ、谷や峰々に潜伏させ、城内の兵の合図とともに一斉に蜂起するなどの攪乱戦法を駆使。領内の百姓子女までを動員し、石つぶてを投げさせるなどの総力戦の結果、徳川の大軍は当初上田城に迫るものの、幾重にも備えられた真田の術策にはまり、神川まで押し戻されて大混乱に陥り、大勢の戦死者を出した。

この戦いにおいて、昌幸は、徳川軍を油断させた上で城内までおびき寄せ、あらかじめしつらえておいた丸太を徳川勢の頭上に落とす、後退する徳川勢に対し城下に火を放つといった奇策をこらしたとの逸話が残されている。

この間、上杉方の協力により普請が進められていた海士ヶ淵城(尼ヶ淵城・伊勢崎城)は、天正13年9月末から10月頃に一応の完成を見ることとなり、天正17年頃に真田昌幸により「上田城」と命名。城と城下町がそっくり川と堀割りで囲まれた堅牢な構えであり、後に再び徳川軍を大いに苦しめることになった。

<今回のストーリー；「上田市誌」引用>

秀吉の天下統一から天下分け目の関ヶ原へ

天正14年(1586年)秋頃になると秀吉の家康に対する対応が一転、それまでの武力による制圧から、秀吉の生母大政所(おおまんどころ)を人質に差し出すほどの懐柔策へと大きく変化した。それに応じ家康は秀吉に対して臣下の礼をとり、豊臣秀吉による天下統一は大きく前進。天正15年3月、秀吉の命により真田昌幸は徳川家康に臣属。同17年2月には、嫡男信幸が駿府城に出仕し、父とは個別に家康の家臣となり沼田城主となった。

天下統一の偉業を成し遂げた豊臣秀吉が慶長3年(1598年)に亡くなると、真田氏は再び試練に立たされることになる。嫡男秀頼を支える石田三成ら豊臣恩顧の大名たちは、豊臣家を危うくする家康打倒を決意し、反家康連合軍の挙兵計画を進めていた。

慶長5年(1600年)7月家康が上杉征伐のため大坂より関東へ下向したのを機に石田三成は五奉行とはかり秀頼をたてて兵を挙げ、「関ヶ原合戦」の幕がきっておとされた。

犬伏の別れ

7月20日家康の命に従い下野(しもつけ)犬伏(栃木県佐野市)に着陣した昌幸、信繁(幸村)父子の元に長束(なつか)正家、増田(ました)長盛、前田玄以ら三奉行連名の勧誘状が届く。「この度の家康の上杉征討は、秀吉の遺言に背いて秀頼様を見捨てたもので、相談の上、家康を討つべく挙兵した。太閤様のご恩を忘れていないなら、秀頼様に忠誠を尽くしてくれるように」との内容であった。昌幸はすぐに犬伏の陣所へ信幸を呼び、信繁を交えて密かに対応を協議した。この密談の内容は次の2つのことによるものと推測されている。

一つは、昌幸は秀吉の援助で大名にまでなれたことの恩義、信繁は青年時代秀吉に出仕したことへの恩義、また、三成の盟友大谷吉継の娘を娶っていること。

一方信幸は23歳で家康に出仕、翌年家康の重臣本多忠勝の娘を妻に迎え、家康の家臣として沼田城主となっていること。

もう一つは、東西いずれかが敗れても他方は生き残ることで「真田」の家名の存続をはかる。

結果、昌幸と信繁は豊臣方(西軍)に、信幸は徳川方(東軍)に父子兄弟が東西陣営にわかれることとなった。